

【講演 7】下総台地における加曽利 E III・IV 式土器の 編年学的研究の現状と課題

加納 実

加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器におけるキャリパー形土器

横位連携弧線文土器（加曽利 E III 式期）に伴うキャリパー形土器群を、加曽利 E II 式土器のキャリパー形土器と区別する特徴として、4 点の様相を示したが、キャリパー形土器のみの分析によって E II 式と E III 式土器の境界を明瞭に線引きすることは困難であると改めて捉えた。

ただし住居跡からキャリパー形土器が単体で出土した場合、この住居の設営・廃棄時期が加曽利 E II 式期新段階であるのか、もしくは加曽利 E III 式期古段階であるのか、そのような判断を迫られる状況では、同一遺跡での一括資料のあり方や、遺跡出土土器群総体の様相から、個別の判断とせざるをえない状況にある。

加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器と大木 8b 式土器／大木 9a 式土器

筆者は加曽利 E III 式土器の成立と大木 9a 式土器の成立が、概ね軌を一にしているとの認識を示してきたが、詳細に観察すると再検討の余地がある。

柏市林台遺跡 52 号住では、大木 9a 式土器に横位連携弧線文土器が伴うことから、加曽利 E III 式土器古段階と捉えることができる。一方、流山市小谷貝塚 SK34 では、大木 9a 式土器には連弧文土器（横位連携弧線文土器以前の土器群）が伴うことから、加曽利 E II 式土器新段階と捉えざるを得ない。このことから大木 9a 式土器は、加曽利 E II 式土器新段階から加曽利 E III 式土器古段階に跨るものと把握しておかなければならない。

下総台地における編年学上の齟齬と解消

港北ニュータウン地域での石井寛氏の一連の集落分析を学ぶ過程のなかで、千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群については、港北ニュータウン地域にあつては加曽利 E IV 式期と把握されているとの認識に至り、港北ニュータウン地域における編年観と、下総台地で一般的に用いられている編年観の対照が求められている状況に鑑み、千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群については、加曽利 E IV 式期と捉え直した。

ここで問題となるのは、従来、加曽利 E III 式期新段階として捉えてきた千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群を加曽利 E IV 式期として捉えなおした場合、下総台地における加曽利 E III 式期新段階の標準的な個体を示す必要である。これについて暫定的ながら、酒々井町飯積原山遺跡例土器群（(9)SI148・(78)SK497）を充てておいた。

下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照

新地平グループによる多摩・武蔵野地域における編年観の提示と集落分析は、今後も当該地域における編年学的研究及び集落研究を牽引していくであろう。この状況に鑑み、新地平グループの各研究者による

一連の多摩・武蔵野地域における編年観と、下総台地における編年観の対照を示した。

例えば、黒尾和久氏によるあきる野市前原遺跡・大上遺跡出土土器群による編年、立川市向郷遺跡・国立市緑川東遺跡出土土器群による編年、東京都羽村市山根坂上・羽ヶ田上遺跡出土土器群による編年と、下総台地における編年を対照すると、概ね、

新地平編年 下総台地編年

12c 期 加曽利 E Ⅲ式期（古段階）

13a 期 加曽利 E Ⅲ式期（新段階）

13b 期 加曽利 E Ⅳ式期

と捉えることができる。

このあたりの対応関係については、大内千年氏が示した編年対応関係（大内 2008）によくまとめられていることから、これを示しておいた（図 1・2）。

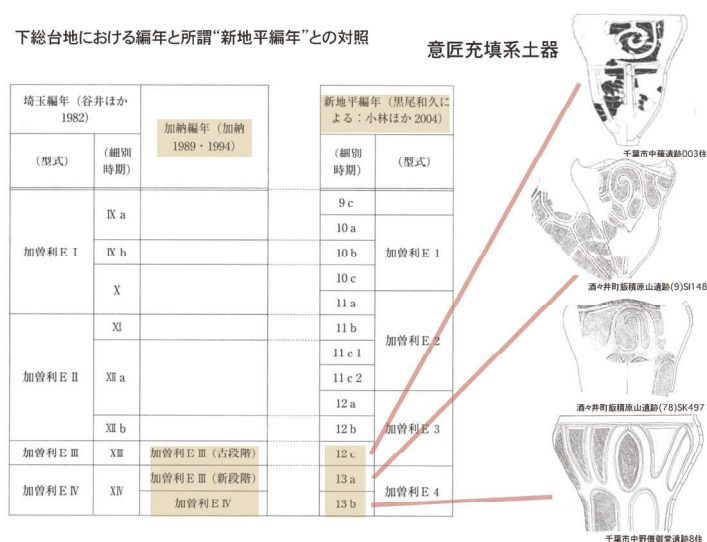


図 1 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照（意匠充填系土器）（大内2008を改変）

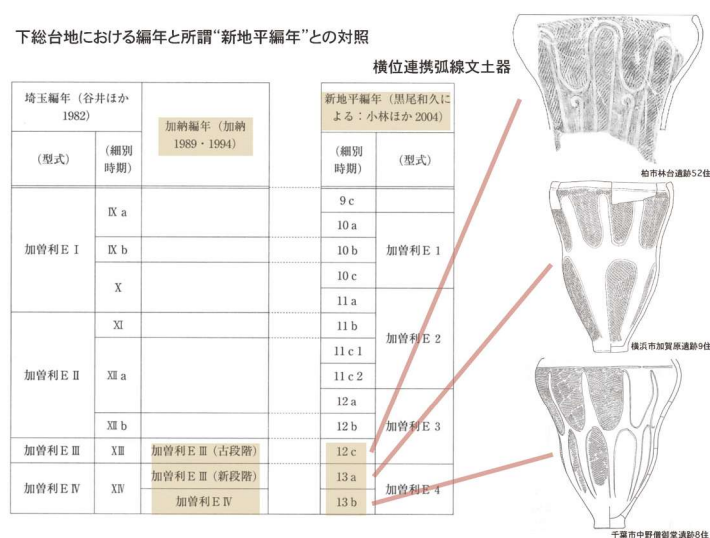
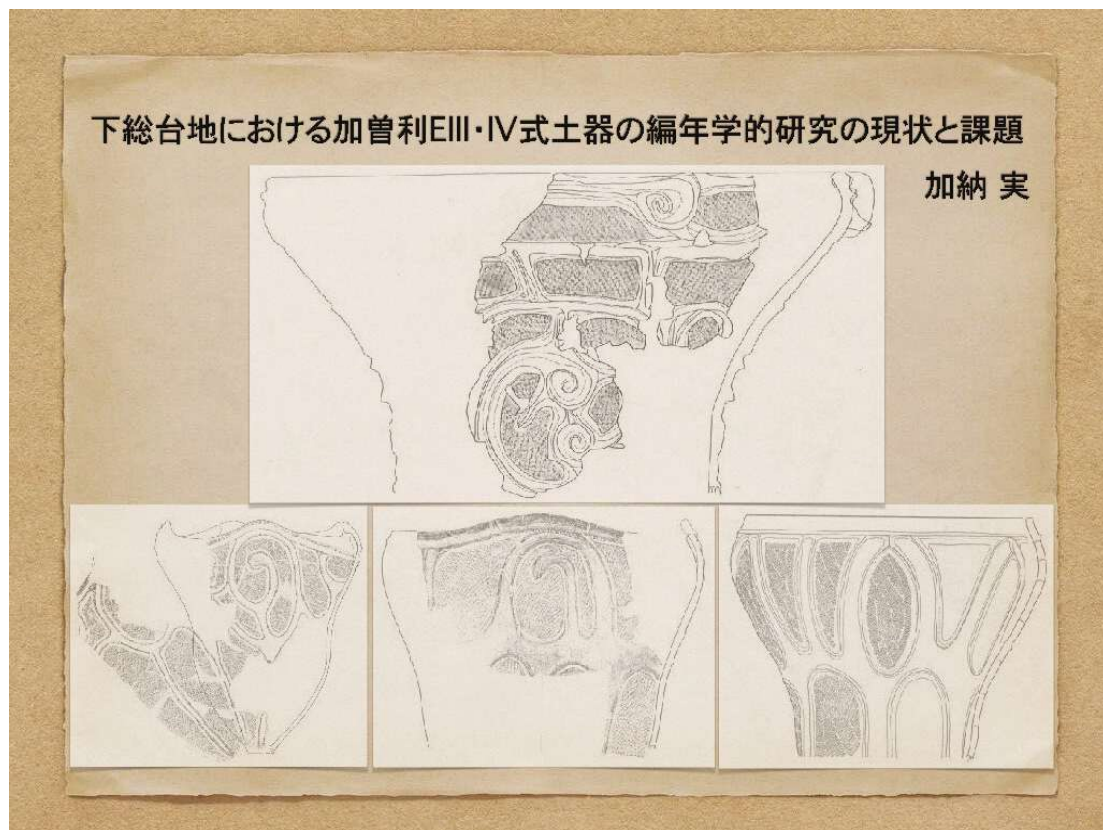


図 2 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照（横位連携弧線文土器）（大内2008を改変）



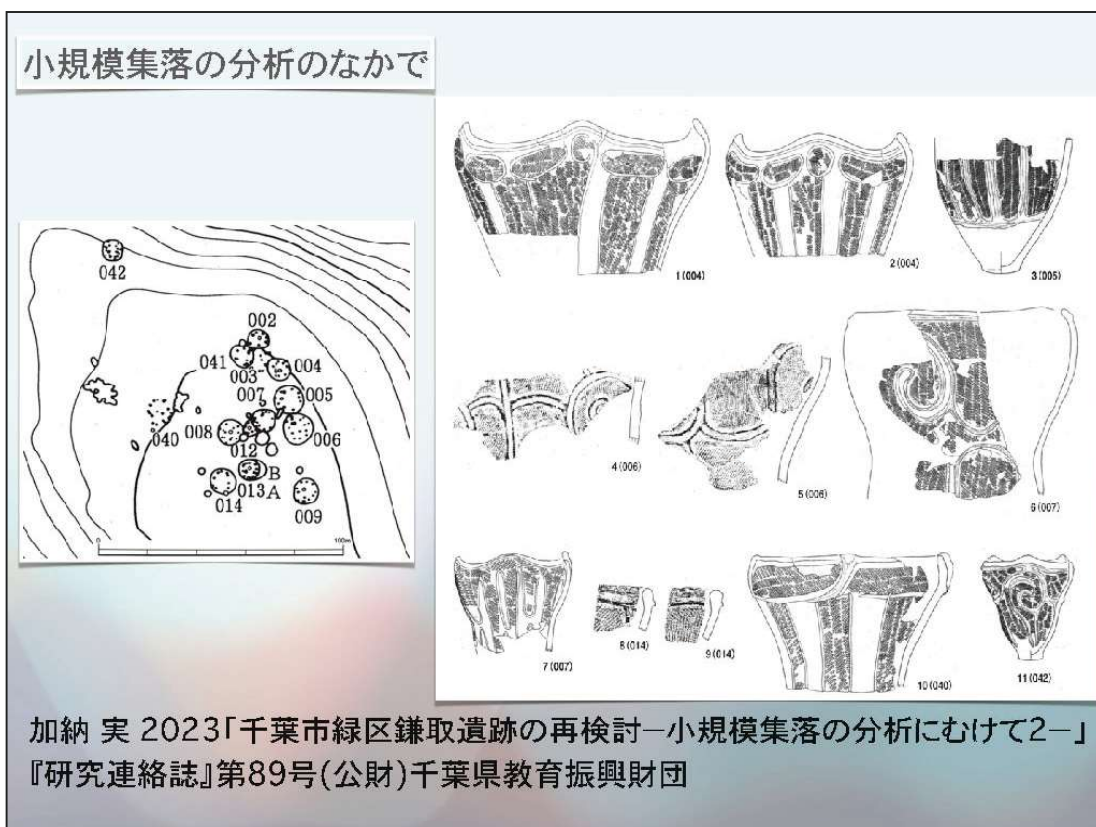
1 加曽利EⅢ式土器古段階

- (1) 港北ニュータウン地域における枠組
- (2) 加曽利EⅡ式土器／加曽利EⅢ式土器におけるキャリパー形土器
- (3) 加曽利EⅡ式土器／加曽利EⅢ式土器と大木8b式土器／大木9a式土器

2 加曽利EⅢ式土器新段階と加曽利EⅣ式土器

- (1) 港北ニュータウン地域における枠組
- (2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消

3 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照



1 加曽利EⅢ式土器古段階

- (1) 港北ニュータウン地域における枠組
- (2) 加曽利EⅡ式土器／加曽利EⅢ式土器におけるキャリパー形土器
- (3) 加曽利EⅡ式土器／加曽利EⅢ式土器と大木8b式土器／大木9a式土器

2 加曽利EⅢ式土器新段階と加曽利EⅣ式土器

- (1) 港北ニュータウン地域における枠組
- (2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消

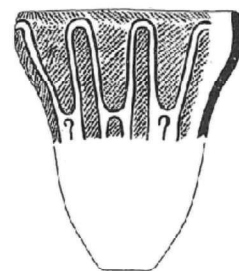
3 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照

1 加曽利EⅢ式土器古段階

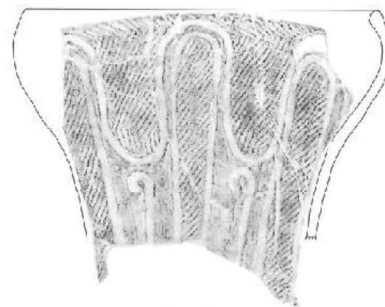
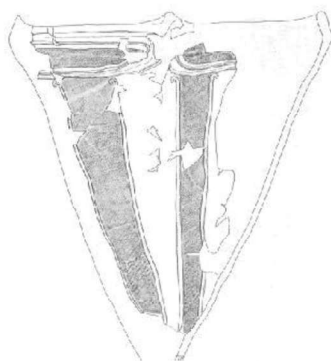
- (1) 港北ニュータウン地域における枠組
- (2) 加曽利EⅡ式土器／加曽利EⅢ式土器におけるキャリパー形土器
- (3) 加曽利EⅡ式土器／加曽利EⅢ式土器と大木8b式土器／大木9a式土器

- Ⅱ式とⅢ式の境は吉井城山遺跡においてB類とされた、
「対向U字交錯文」(稲村1990)の成立をもってあたることとなる
- この段階には従前の「口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢」が
強い流れをもって存続していることは、ここで断る必要はなかろう
- この段階を「EⅢ式古段階」とする(石井2014)

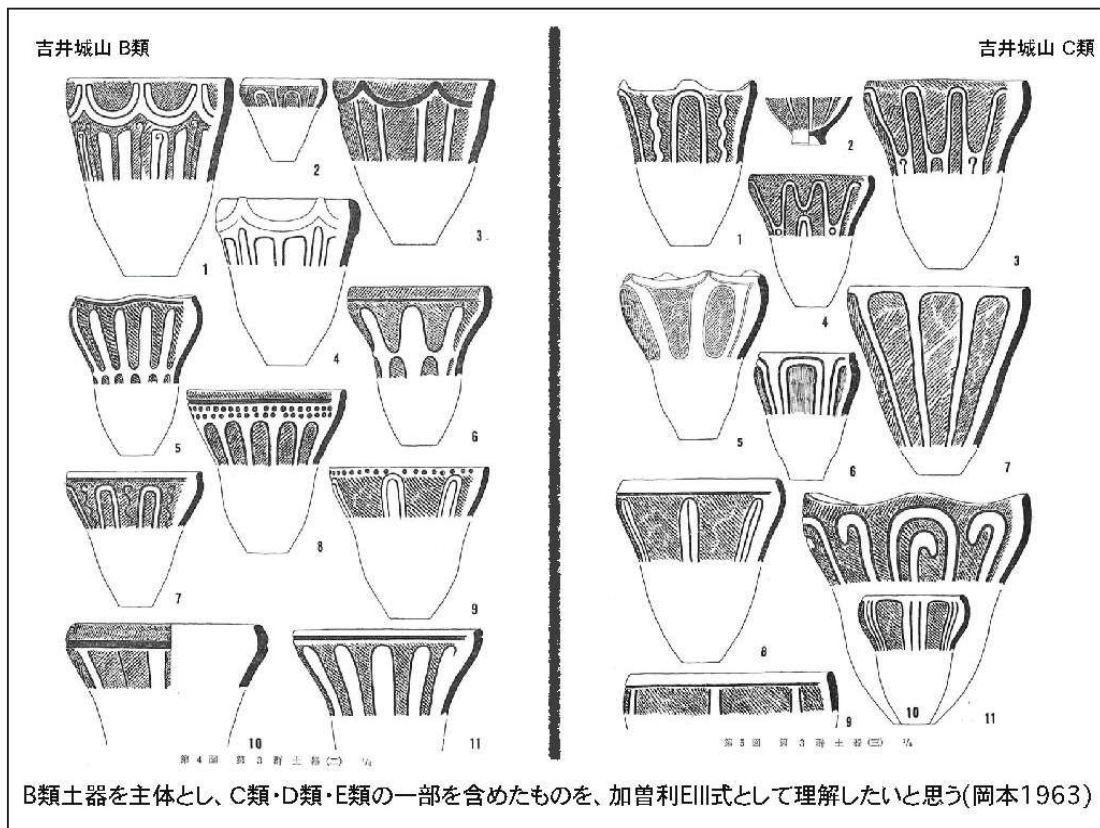
対向U字交錯文



吉井城山



柏市林台52住



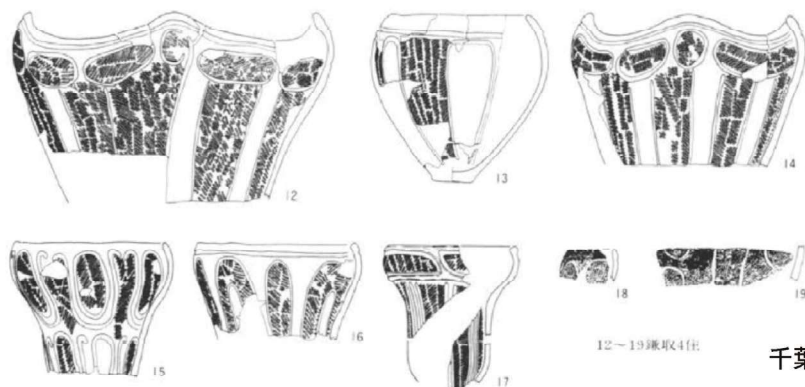
1 加曽利 E III 式土器古段階

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

(2) 加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器におけるキャリパー形土器

(3) 加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器と大木 8b 式土器／大木 9a 式土器

- 1) 口縁部文様帯と胴部文様帯を区別する明瞭なヨコ一次区画効果(稲田 1972) が減少する
- 2) 懸垂文効果を有する無文部が拡大し、本来“地”の部分であった縄文部に懸垂文効果に移りつつある
- 3) 懸垂文を描出する沈線が、縄文部の上端で連結し、懸垂文効果が完全に縄文部によって描出される
- 4) 懸垂文を描出する沈線が口縁部文様に癒着(付着)し一体化の傾向が窺える



千葉市鎌取 4 住

1 加曽利 E III 式土器古段階

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

(2) 加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器におけるキャリパー形土器

(3) 加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器と大木 8b 式土器／大木 9a 式土器

●大木 8b 式土器

器面に縄文を施した後に、隆帯そのもので渦巻意匠を施す

盛岡市繫遺跡例→隆帯剥落部分に地文の縄文が明瞭に残っている

●大木 9a 式土器

隆帯で囲ったパネル状の渦巻状意匠を施した後に、この意匠内に縄文を充填する

○器面に施される意匠が、「描線そのもの」(大木 8b 式土器)によるものから、
「隆帯で囲まれたパネル状の意匠」(大木 9a 式土器)に移行することになる。

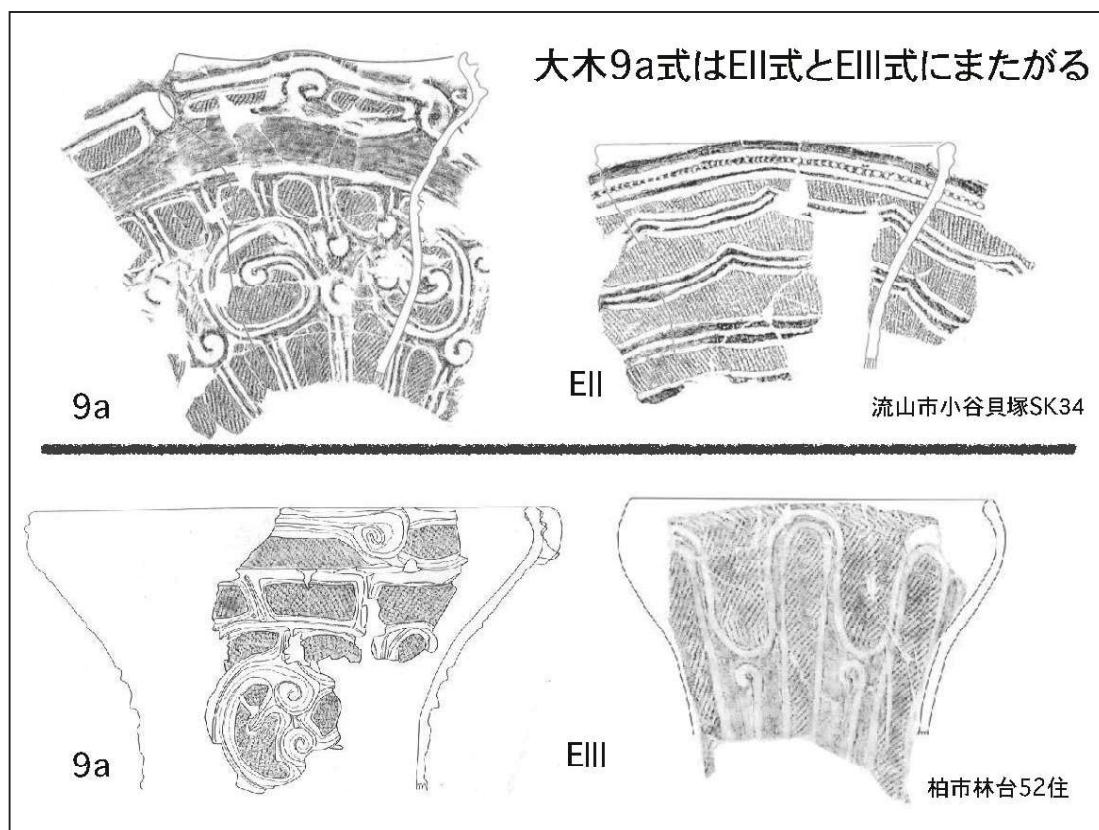
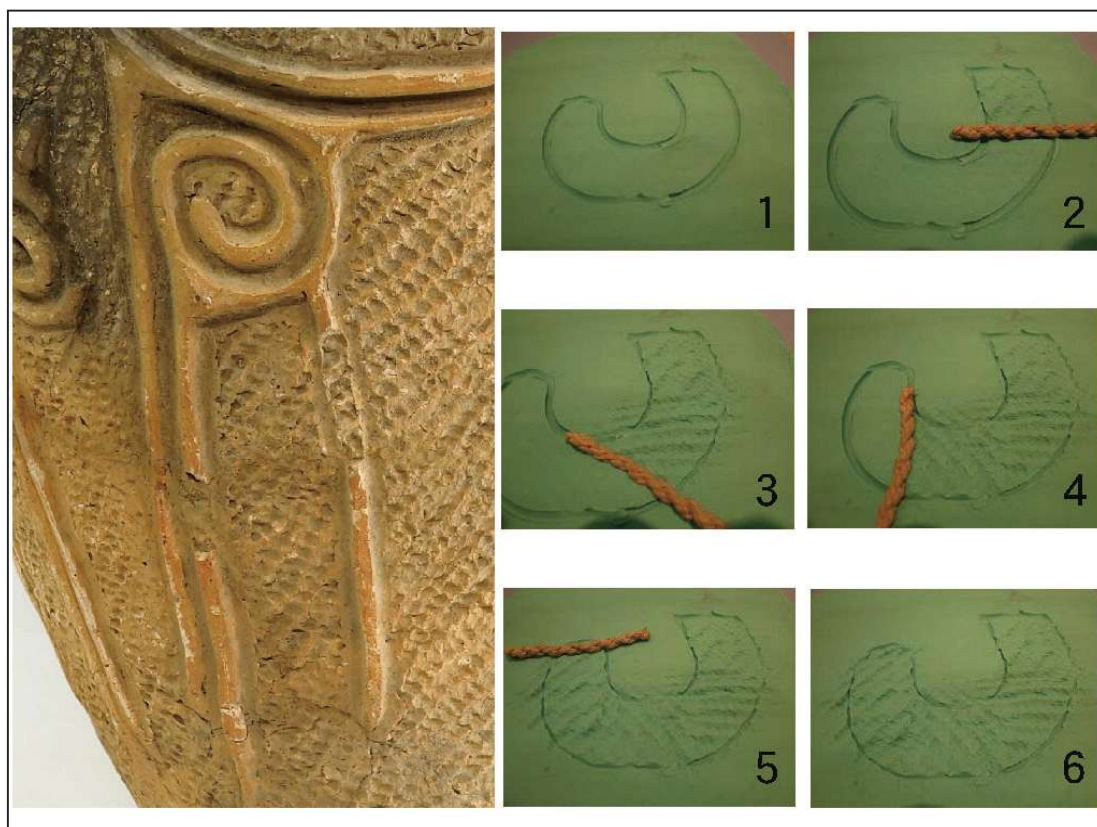
○描線で囲ったパネル状の意匠内に縄文を施し、
このパネル状の意匠を器面全体に隙間なく充填していくようになる

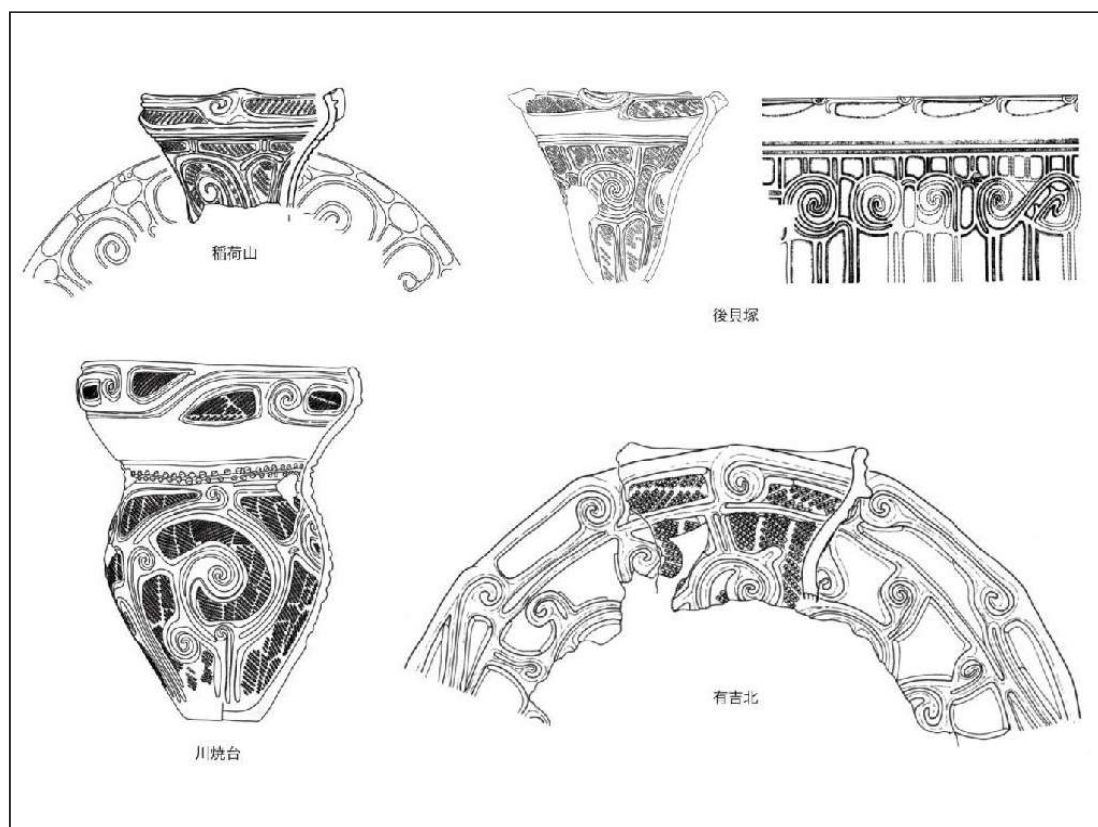
○描線で囲まれたパネル内の縄文は、隆帯の施文後に施されることから、
描線に制約されて、意匠内に充填されることになる。



盛岡市繫遺跡







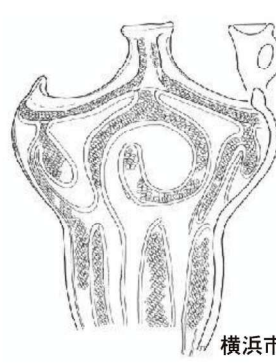
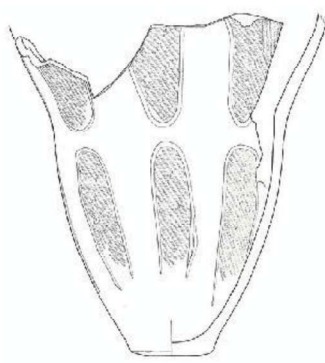
2 加曽利EIII式土器新段階と加曽利EIV式土器

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

(2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消

- 「III式新段階」では口縁部文様帯を有するキャリパー 形深鉢はほぼ姿を消し、残存した場合も形骸的な様相となる
- 「対向 U 字文類型」にあっては器形の大形 化が進み、深く明瞭であった沈線は、広く浅いものへと変化する
- 逆に細めの鋭い沈線による描出をなす一群が参画するが、この段階では中形から小形の深鉢に多く用いられる傾向がある
(石井 2014)

EIII式土器新段階



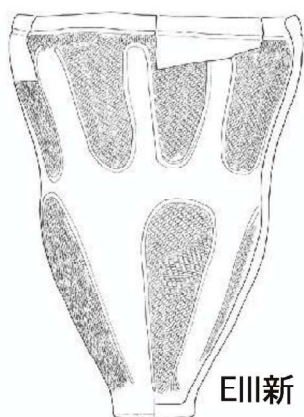
横浜市加賀原

2 加曽利EIII式土器新段階と加曽利EIV式土器

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

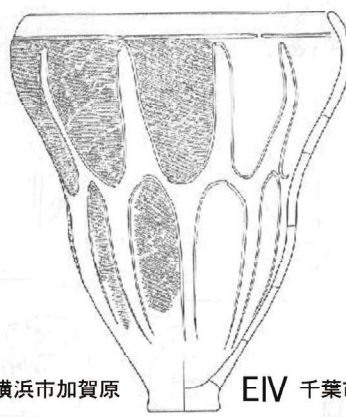
(2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消

- 「IV式」は「III式新段階」からの連続性が強く、分別に苦慮する事例も多い」
- 口縁部を巡る沈線や隆線に、文様の上端が接続する事例が増加する」
- 文様の上端が接続する事例について、
この特徴は称名寺式 初頭段階では更に徹底して、口縁部沈線や隆線の個所で文様上端が途切れる事例が通例化する
(石井 2014)



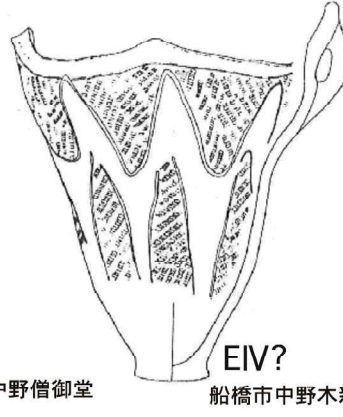
EIII新

横浜市加賀原



EIV

千葉市中野僧御堂



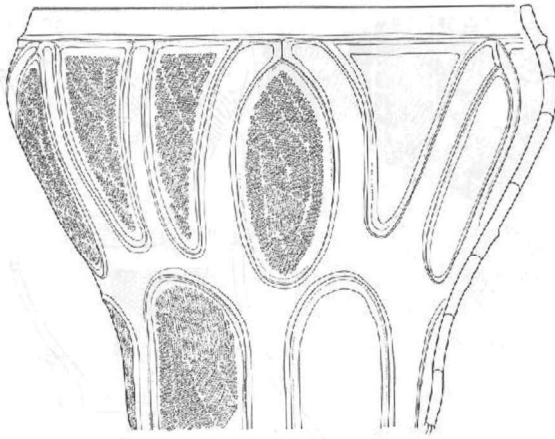
EIV?

船橋市中野木新山

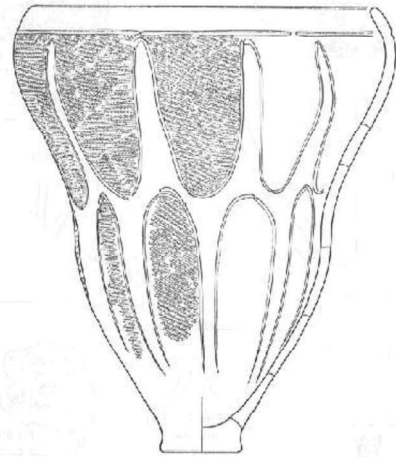
2 加曽利EⅢ式土器新段階と加曽利EⅣ式土器

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

(2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消



意匠充填系土器



横位連携弧線文土器

千葉市中野僧御堂8住

加納がEⅢ新としてきたもの → EⅣ式へ

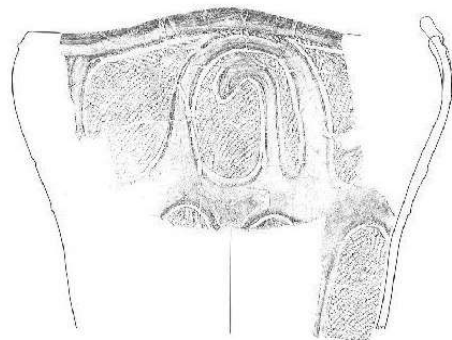
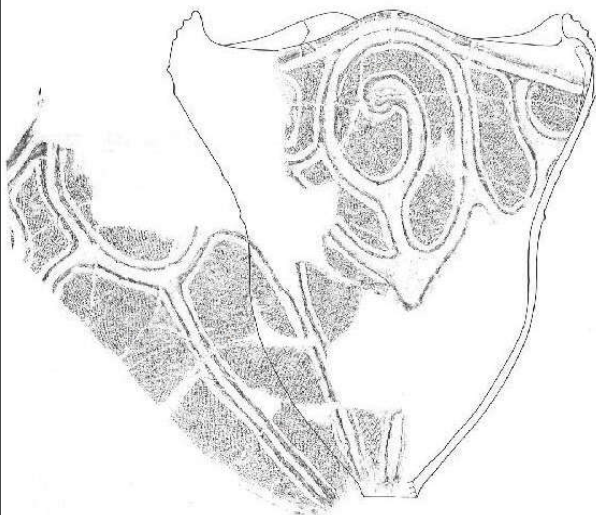
2 加曽利EⅢ式土器新段階と加曽利EⅣ式土器

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

(2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消

意匠充填系土器

EⅢ新の標準的な資料?



酒々井町飯積原山遺跡



3 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照

第1表 編年対応関係

埼玉編年（谷井ほか 1982）		加納編年（加納 1989・1994）		新地平編年（黒尾和久による：小林ほか 2004）	
（型式）	（細別時期）			（細別時期）	（型式）
加曾利 E I	IX a			9 c	
	IX b			10 a	加曾利 E 1
	X			10 b	
加曾利 E II	XI			10 c	
	XII a			11 a	加曾利 E 2
	XII b			11 b	
	XIII			11 c 1	
加曾利 E III	XIV	加曾利 E III（古段階）		11 c 2	
加曾利 E IV	XV	加曾利 E III（新段階）		12 a	加曾利 E 3
		加曾利 E IV		12 b	
				12 c	
				13 a	加曾利 E 4
				13 b	

大内(2008)

3 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照

意匠充填系土器

第1表 編年対応関係

埼玉編年（谷井ほか 1982）		加納編年（加納 1989・1994）	新地平編年（黒尾和久に よる：小林ほか 2004）	
（型式）	（細別 時期）		（細別 時期）	（型式）
加曽利 E I	IX a		9 c	加曽利 E 1
	IX b		10 a	
	X		10 b	
加曽利 E II	XI		10 c	加曽利 E 2
	XII a		11 a	
			11 b	
	XII b		11 c 1	
			11 c 2	加曽利 E 3
加曽利 E III	XIII	加曽利 E III（古段階）	12 a	
加曽利 E IV	XIV	加曽利 E III（新段階）	12 b	
		加曽利 E IV	12 c	加曽利 E 4
			13 a	
			13 b	

3 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照

第1表 編年対応関係

横位連携弧線文土器

埼玉編年（谷井ほか 1982）		加納編年（加納 1989・1994）	新地平編年（黒尾和久に よる：小林ほか 2004）	
（型式）	（細別 時期）		（細別 時期）	（型式）
加曽利 E I	IX a		9 c	加曽利 E 1
	IX b		10 a	
	X		10 b	
加曽利 E II	XI		10 c	加曽利 E 2
	XII a		11 a	
			11 b	
	XII b		11 c 1	加曽利 E 3
			11 c 2	
加曽利 E III	XIII	加曽利 E III（古段階）	12 a	加曽利 E 4
加曽利 E IV	XIV	加曽利 E III（新段階）	12 b	
		加曽利 E IV	12 c	
			13 a	
			13 b	

大内(2008)

The image shows three line drawings of pottery vessels with horizontal arc line patterns. Red lines connect the table entries to the drawings: the top drawing is connected to '加曽利 E 1' (IX a, IX b, X); the middle drawing is connected to '加曽利 E 2' (XI, XII a, XII b); and the bottom drawing is connected to '加曽利 E 3' (11 c 1, 11 c 2) and '加曽利 E 4' (12 a, 12 b, 12 c, 13 a, 13 b).

終

加納⑫